

## ターミナルについて

今回は、「この世とあの世の乗換駅」という意味のターミナルについて考えたいと思います。

医療の世界では、ターミナル・ケアという言葉が使われています。私が高校の授業で担当している「倫理」でも教科書に出てきますし、大学センター試験の「倫理」にも出題されるほど一般化してきた言葉でもあります。しかしながら、ターミナル・ケアを翻訳すると、「終末期医療」といった訳語が使用されています。

さて、ここで気になるのは、ターミナルは終末期なのかということですが、普段私たちが使用しているターミナルは、鉄道の路線が複数集まっている宝塚や梅田のような駅を意味しています。そこには、乗り換える接点としての意味があります。乗り換えはどの方面からでもどちらの方面へも可能で、朝夕の通勤通学なら毎日往復しているわけです。ところが、終末期という訳語は、生の世界であるこの世から死の世界であるあの世に乗り換える一度きりの通過点という意味になります。

もちろん、医療の世界ではそれはそれで仕方がないのだと思います。しかしながら、私たちの心が、それで納得できるわけではないと思います。私たちは、いつでも自由に電車に乗って、ターミナルで乗り換え目的地向かい、また帰路に着きます。でも、同じようにあの世から生き返ることはできません。しかし、それだけなのでしょうか。私たちのターミナルに寄せる思いは、鉄道のターミナルと同じ

ように、「この世とあの世がつながっている接点」として理解することで、共感が得られるのではないかと思っています。

最近、臨済宗妙心寺派の禅僧で芥川賞作家の玄侑宗久（げんゆうそうきゅう）師の『アミターバ 無量光明』という本を読みました。芥川賞受賞作の『中陰の花』以来、師の作品が発刊されるたびに読んでおりますので、「この本にも素直に感動いたしました。義母の死をきっかけに書かれたこの小説は、ターミナルをどう乗り換えるかがテーマです。アミターバ（無量光）とは、「このリーフレットのタイトル『あみたまばあ』と同じ言葉で、アミターユス（無量寿）とともに阿弥陀仏のお名前です。むろん臨済宗の禅僧が、阿弥陀さまのことについて直接的に書かれているというわけではありません。

しかし、作品のなかでターミナルにさしかかったとき現れる巨大な光源とは阿弥陀さまにほかならないだろうと思われる。私たち自身、ターミナルで阿弥陀さまの来迎に乗り換える心の準備を日頃からすべきで、浄土宗の教えはそのための教えです。

お盆にはご先祖様や先亡の精霊が、ターミナルで乗り換えて帰ってこられます。そしてまた、ターミナルからお浄土に戻っていかれます。私たちが、ターミナルを一番身近に感じられるこのお盆は、ターミナルを通して、「ご先祖様から私たちまでアミターユス（無量寿・永遠の命）につながっていることを実感できる貴重な時期でもあります。

